

資料報告

スポーツを考える（その2）
バルセロナ・オリンピックに参加して

Topic on the Barcelona Olympic Participation

安田 矩明

N. Yasuda

1. はじめに

筆者は第25回バルセロナオリンピック大会に日本陸上競技チームの跳躍コーチとして参加した。大会は7月25日～8月9日まで開催され、史上最高の174カ国、地域の選手団約15,000人が参加した。その内、日本選手団は総勢377人（陸上競技は選手33人、役員9人）が参加、25競技に熱戦を展開した。

開催国スペインは、IOC会長（国際オリンピック委員会）フアンプレアントニオ・サマランチ氏の出身地であること、また世界は激変による冷戦構造が溶け、更には南アフリカが32年振りに復帰、12年振りにキューバ、北朝鮮の参加など、話題の多いオリンピック大会となった。筆者自身オリンピック大会は、1960年の第17回ローマ大会（当時は85カ国、約6,000人の選手団の参加）には選手として出場、1984年の第23回ロサンゼルス大会、1988年の第24回ソウル大会は支援コーチとして参加した。だが、バルセロナ大会の選手村が男女が一緒ということは史上初めてのことで、村内はまさに平和で“世界は一つ”といった感じが強かった。従来の選手村は、男女の宿舎は鉄条網の柵で区切られ、警備が厳しかった。

しかし、このような平和の中で開催されたオリンピック大会であったが、記録を争う競技は低調に終わった。その原因は厳しいドーピングチェック等にもあるが、アマチュアとプロフェッショナルの境がなくなったことで、特にステート・プロと云われた東欧諸国の国家をあげての強化ができなくなったことも要因の一つといえる。そこで今回は筆者自身が体験した舞台裏、日本陸上競技の強化方法と外国の比較等も含

め、話題と問題点を採り上げた。

2. 厳重な警戒とチェック

ボランティア少年の転機で救われた

オリンピックはテレビを通じ、全世界の人達に興奮と感動と平和の素晴らしさを伝えたい。しかし、参加した選手団にとっては、ものものしい入村時の荷物、ボディチェックなど初体験者にとっては驚きもであったようだ。村内

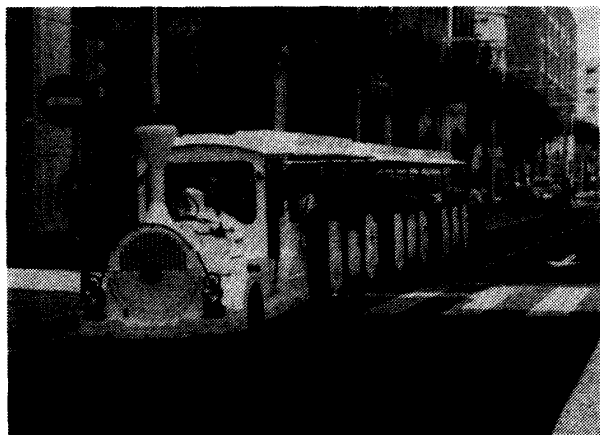


選手村入口では、必ずIDカードと荷物が厳しく調べられる。

には数多くのボランティア活動の青少年（オリンピックでは16歳～25歳の青少年4万人が参加）が目立ったが、戦車が数カ所、それに軍隊と警察が至る所で目を光らせていた。

選手団は入村時にはIDカードを着用し、村内でも24時間営業を続ける大食堂へは首からIDカードをぶら下げ、厳しいチェックではいられなければならなかった。更に選手団はそれぞれの大会会場でも、金網の柵内で幾つかのチェックの関門を通過し、定められた場所でしか応援はできない。この限られた行動範囲でどう行動し、選手たちにサゼッションするか、コーチ陣も大変であった。

陸上競技場の選手団席は、第2コーナーの限られた柵内で、最も観戦しにくい場所にある。それには一般の人達は高価な入場料を支払っているのだから、無料の選手団は当然場所が悪いのも理解できる。だが、私のような跳躍担当コーチになると、外的条件(主に風、気温の変化等)が大きく左右するので、選手の助走等の具合をチェックせねばならない。観察の場所は当然、踏み切り地点の真横が理想となる。そこで選手団の柵以外の入場券(適切な場所を事前に調査)を入手するわけだが、何カ月前から申し込んで



オリンピック選手村内部は、平和そのものであった。

いても、その日に人気種目、スーパースターが出場となると、なかなか手にはいかない。

そのような時にはこれも国際経験が豊かでないと考えつかないのだが、選手団席からゲートへ抜ける階段で、他人に気づかれないように“バッチ”“Tシャツ”を係り員にプレゼントして、難関を切り抜けた。私も悪いと知りながら、選手に関しては必死だけに、何回か活用させてもらった。

この事について書く時に今でも心臓がどきどきする体験をしたことがある。8月8日、この日は女子走高跳の決勝が夜6時半から開始されるとあって、担当コーチとして佐藤恵選手に付き添った。彼女は数多くの国際経験をしているが、オリンピック3回連続出場で、決勝進出したのはソウルに次いで2回目で秘かに入賞を狙っていた。8月6日の予選では1m92をとび、16人が8日の決勝に進出したのだ。

この日、私と佐藤選手、トレーナーと3人は、

午後3時35分のバスでオリンピック・スタジアムに行く予定をしていたが、私は彼らより先にバス停に行った。15分も前に到着、指定番号の位置にバスが既に来ていた。「トウスタジアム？」とボランティア少年に聞くと彼は「イエス」と答え、乗り込んで佐藤選手を来るのを待った。

選手村の陸上コーチ陣(8人)の生活は、朝は5時過ぎに起きて午前9時半開始の試合に対処する者、午後は6時開始で帰村するのは11時過ぎ、食事を摂って部屋に戻るのは12時前といった生活の連続である。私は更にその日の陸上出場選手の活動日誌と翌日の行動予定を書き、JOC(日本オリンピック委員会)本部に報告することが職務になっていた。それだけにコーチ陣はわずか1~2時間だが、むさぼるように昼寝をしないと身体がもたない。

佐藤選手とトレーナーも出発より10分前に到着、私が先に乗り込んでいるので急いで乗ってきた。不思議なことにバスには、投てき選手が2人乗っているだけで、他の選手はまだ誰も来ないのに動き出した。バスはスタジアムまで約30分かかるので、私はこの日昼寝をしていなかったこともあって、それこそ数秒後に熟睡してしまった。

それからどの位しただろう。「先生、先生……」と盛んに佐藤選手が声を掛けるので、驚いてとび起きた。「バスが反対方向に走っていますよ」(佐藤選手)

外を見ると、まったく知らない田舎の道を走り、後方遠くにオリンピック・スタジアムのモンジュクの丘が見えるのではないかと。私は一瞬、青くなった。佐藤選手は「どうしよう、どうしよう」と泣いてしまう有様。

「大丈夫、心配するな」と私は云ったが、内心はおだやかでなかった。早速、運転手とボランティア少年のガイドに尋ねるが、話せる言葉はスペイン語だけ。でもバスはスローイング・スタジアム(投てき練習場)に行くことが理解できた。同乗の2選手も東欧の選手で英語はまったく駄目、これにはまいってしまった。

私は腹を決めて「とにかく投てき場に行き、

時間も余裕があるから、事情を説明し、タクシーでも呼ぼう」と佐藤選手をなぐさめた。ところが投てき場は、周辺には何もなくて、畑の中にぼつんとあるような所で、タクシーなんか呼べる所でもない。

さてどうしようか——。私も困り、佐藤選手は真っ青で涙がボロボロ。この時、咄嗟に思ったのが、バッチとTシャツの活用だった。運転手とガイドは、我々が間違った場所に来たこと、6時半から決勝があることは理解してくれたが、バスのコース変更はできないと首を振らなかった。私は過去の体験上、何かがあったときの事を考え、持参のバッグにはバッチとTシャツを入れていた。

私はバッチ、Tシャツを2人に渡し、再度交渉すると、ボランティア少年のガイドはウINKをし、バス取り付けの電話で本部と激しくやり取りをするのをたまらない気持で待った。この数秒間の長かったこと……。

「オッケー」この一言は、神様の声のようにも思えた。バスは100キロを越す猛スピードで、オリンピック・スタジアムへ、佐藤選手はウォーミング・アップも十分に間に合い、7位に入賞してくれた。今でこそ裏話として書けるが、ロサンゼルス、ソウルのオリンピックで、この様な間違いがあったら許されなかったろう。また、ボランティアの少年の転機がなかったら出場できなかったと思うと、今でも冷汗が出るほどだ。

佐藤選手自身も心理的影響が大きかったと思うが、彼女とは2度の世界選手権、3度のオリンピックで行動を共にし、回を追うごとに成長する姿に心強く感じたし、この国際経験が克服の要因になったと思う。

厳しいチェック、ルールに守られたオリンピックでも、心の情が伝わったとは、私にとって忘れる事の出来ない事件として披露することにした。

3. ドーピングが呼んだ波紋

ドーピングの認識

ドーピングという言葉が、最も世界に大きくクローズアップされたのは、1988年のソウル・

オリンピックであった。ドーピングとは競技成績を高めるために薬物を用いることで、ドーピングを禁止する側(IOC)としようとする側で何かと問題を残してきた。しかし、現実には利用する側が、一步も二歩も研究が進み、矢面に立つ選手は少なかった。

こうした背景には「オリンピックで金メダルが取れるならば、5年後に死ぬとわかっているけど薬を使うか」という質問に対して、アメリカ選手でも52%が「イエス」と答えている。また、冷戦構造が溶けなかった時代の東欧諸国ではもっとその確立が高い答えが出ている。

1988年のソウル・オリンピック前までは、ドーピングに関して、日本選手でもオリンピックに参加する以外の者は、まったく無知に近かった。私自身も日本選手が国際大会で、競技力向上を目的としたドーピングによる出場資格をはく奪される選手もいなかったのも、無関心の一人であった。ところが、思わぬ事で、その無知さを指摘され、勉強することになったのである。

ソウル・オリンピックの翌年(1989年)10月に日本陸連ではウェイト・トレーニングの指導者として、ブルガリア陸上競技連盟のナショナル・コーチ(投てき)で26年間の指導経験を持つペーター・ラフマンレイエフ氏(50歳)を招き、全国各地で講習会を開いた。ブルガリアの人口は800万人、だが、中京大学豊田学舎のような全天候型トラックは、わずか4つしかない。そのブルガリアがソウル・オリンピックの陸上競技で金メダル2個の他に、男子3人、女子は6人が入賞している。そのブルガリアのオリンピック・チームが、ソウル・オリンピックの直前に水戸市で合宿、私も彼らの練習風景を見物に行った。

特に選手で注目したのが、三段跳のマルコフ選手であった。全身がバネのかたまりというか、想像に絶する筋力で、1987年の世界選手権(ローマ)で17m92をとび、前回に紹介したウィリー・バンクス選手(米)の17m97を破る一番手とみたからだ。彼はオリンピック直前の練習というのに、240kgのバーベルをかつぎ、片

足のバウンディングする姿は「人間と思わない」驚異すら感じた。水戸キャンプの後のソウル・オリンピックは、風の条件が悪かったにもかかわらず、1回目に17m 61を跳び、他の選手を寄せつけずに優勝した。

ブルガリアのトレーニング方法は、世界の中でも最も進んでいると云われ、何んとしても指導者を招きたく交渉の結果、ペーター氏が来日することになったのだ。勿論彼は中京大学豊田学舎にも招き、2日間熱心に学生諸君を指導してくれた。

ブルガリアの選手育成法については、9歳～13歳から将来性ある選手をスポーツテストによって4グループ(スプリント、ディスタンス、ジャンプ、スローイング)に編成する。14歳～16歳を基礎づくりの期間。17歳～19歳の時期になって、自分に適した専門種目を選択するなど、25歳前後をピーキングにもって行く、一貫した指導がなされている。

各段階別のスポーツテスト内容、トレーニング内容には学ぶべき事が多く、今後の“スポーツを考える”項目で紹介したい。さてドーピングについては、当然ながら講習会の席上でも質問された。だが、ペーター氏は「ブルガリアでは筋力向上を狙いとして、プロテインを摂取させている。しかし、適切な取り方を知っておくことが大切」と語り、次のような処方述べた。

「筋力トレーニングを重視する1月～3月は、1日10mmgを各2週間連続して飲み、その後2週間は飲まない。年間毎日続けても効果がない」とのことであった。私はペーター氏の研修会内容をそのまま陸上競技専門誌に載せた。この点について即座に反応があったのは、某医科大学の医師からであった。

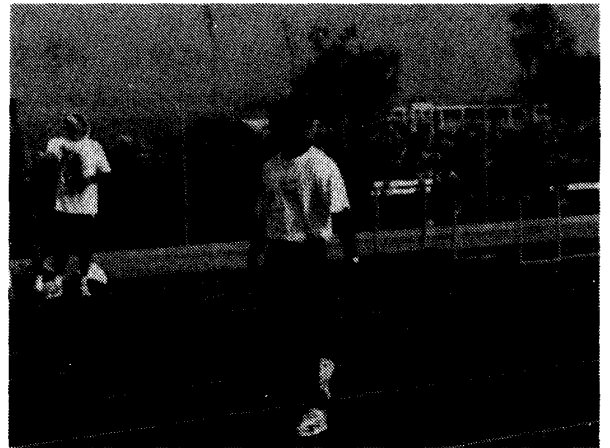
「プロテインではなく明らかにドーピングであって、その内容を詳しくお教えてほしい」

私にとっては直訳をそのまま紹介しただけであり、何も返答ができなかった。医師の指摘で、私自身が勉強させられたのである。その後、ペーター氏から中京大学の印象がとても良かったのだろう、何通かの感謝の手紙を受けとっている。

三段跳のマルコフ選手本人がその後、1990年

3月に豊田校舎に来校、バンクス特別講師と一緒に話し合ったが、バンクス氏も彼の筋力を聞き「信じられない」を連発していた。しかし、マルコフ選手の練習、身近に見る姿にはソウル・オリンピック直前と比較して、ひと回り小さくなった感じがした。これはあくまでも予測だが、厳しい検査をさけるため、また過去の栄光を傷つけまいと、ドーピングを禁止したのではないかと思えた。マルコフ選手はバルセロナ・オリンピックでは、16m 46しかとべず、予選落ちと信じられない結果に終わった。

ベン・ジョンソンは何故復活できなかったか



ソウル・オリンピック当時、練習では常に裸で肉体美を誇ってみせたジョンソン選手(カナダ)は、バルセロナ大会では一度も裸を見せなかった。

陸上競技の中でも世界一の“速さ”を争う100mは、最も人気のある種目である。かつて走路が土の時代には「人間の限界は10秒0」と云われた時代があった。1964年の東京オリンピック直前に猪飼博士(東大教授=故人)に取材した事があるが、将来の記録の可能性について「10秒の壁を破る選手のタイプは、身長が1m 85前後で、体重が80kg以上あり筋肉質で東京浅草観音の仁王様のような体と24歳までの年令でないと破れないだろう」と予測した。

猪飼氏発言後の東京オリンピックでは、まさに言葉を裏付けるようなボブ・ヘイズ選手(米)が、追い風(5.8m)ながら準決勝で9秒9、決勝では10秒0の公認タイムで圧倒的な強さで優勝した。ヘイズは身長183cm、体重86kg、

年齢は21歳8カ月で、猪飼氏の予測に驚きもし、感心させられたことをはっきりと記憶している。

いつの時代もオリンピックの100mは大きな話題を呼ぶが、1968年のメキシコ大会から、走路が土から樹脂性のオールウェザー（タータン＝商品名）となり、ジム・ハインズ選手（米）が10秒0を破る公認9秒9の世界新をマークしたのである。1972年のミュンヘン大会からは手動時計から電気時計に変わり、その誤差は0.24秒あるとされ、10秒0の手動だと電気では10秒24になる。

さて1988年のソウル・オリンピックでは、ベン・ジョンソン選手（カナダ）が、9秒79と人間の限界以上を思わせる世界新を出したのである。ジョンソン選手の快走を間近に観た時、ふと頭をダブって過ったのがまさにヘイズであった。両者の強さといい筋肉質のタイプは、まさに瓜二つの感があった。

ジョンソン選手は前年（1987年）の第2回世界選手権（ローマ）でも、ライバルのカール・ルイス選手（米）を破り、この時も9秒83の世界新を出した。ソウル大会の時のジョンソン選手の年齢は26歳10カ月で、身長180cm、体重78kgであった。

しかし、ジョンソン選手がソウル大会中に、ドーピング検査で陽性が判明、当然ながら前年の世界選手権での9秒83、ソウル・オリンピックの9秒79は剥奪され、以後2年間の競技会出場禁止の制裁を受けたのである。このニュースは全世界に大きな衝撃を与え、日本でも幾つかの商業が全て解消された。本人にとっては「他人にはめられた。採尿のびんをすり替えられた」など、当時のマスコミをにぎわした。本国カナダでも何度か裁判の末、黒と断定された。

そのジョンソン選手が、バルセロナ大会でカムバックを狙ったが、それぞれの組で一次予選2位（10秒55）二次予選4位（10秒30）準決勝8位（10秒70）と決勝進出できずに敗退した。期間中に何回かジョンソン選手の練習を観察してきたが、ソウル大会時の筋骨隆々な姿がしば

んだ感じを受けた。この時、既に関係者の目は「決勝進出は不可能」とみており、その通りになった。

ジョンソン選手がソウル大会で失格した後、疑惑と思われる選手たちが抜き打ちに検査され、数名の選手たちに陽性反応が出て、バルセロナ・オリンピック出場の夢がたたれた。中でも南アフリカで合宿中に検査を受けた旧東ドイツのカトリン・クラッペ選手と他2人の3人が同じ陽性反応が出て、ドイツ国内では大変な話題となった。この判定に不服として裁判ざたになり、ここでは認められ現場復帰となるが、オリンピック出場は断念した。しかし、その後、再検査の結果、再度陽性反応が出て、4年間の試合出場禁止という厳しい裁定となった。この決定は事実上、現役に復帰の可能性はないとみてよいだろう。

クラッペ選手は1991年の第3回世界選手権（東京）で、女子100m10秒99、200m22秒09と両種目に圧勝、バルセロナ大会には優勝候補の筆頭に上っていた。クラッペ選手の判決も世界陸上界では大きなショックであった。

ソウル・オリンピックでは、10人のメダリストが失格、その内重量挙げが5人はいつている。バルセロナ大会では、陸上競技は4位までの選手がドーピング検査を受け、他はランダム式に何人かの選手が検査を受けた。その結果、4位になった4人が陽性反応が出て、入賞からはずされた。そのため女子マラソンで5位となった山下佐知子選手が、4位のビクタギロワ選手（旧ソ連）が陽性反応で失格したため、4位にくり上った。

さて話をベン・ジョンソン選手に戻すが、ソウル大会で“黒”と裁断され、記録が取り消しになったわけだが、本人も最終的に禁止薬物を認めたため、過去6年にさかのぼって記録が抹消され、前年の9秒83も幻の記録になったのである。

ジョンソン選手は筋肉増強剤を使っていたとみられる時期に重点を置いていたウェイト・トレーニングのスクワットとベンチプレスのマックスは272kgと182kg、発覚後は250kg、175

kgで筋力が回復したとのことであったが、バルセロナではソウルのような力強さはみられなかった。現在の100mの世界記録は1991年の世界選手権（東京）でカール・ルイス選手がマークした9秒86である。

ドーピング検査はどのように行われるか

現在ドーピング検査は、IOC主催のオリンピック、IAAF（国際陸連）が主催する世界選手権、ワールドカップ、アジア大会、グランプリ等の国際大会、それにユニバーシアード大会、日本陸連が主催の日本選手権等は必ず検査を受けなければならない。例えば日本選手権の場合は勝者は採尿され、その採尿は国際陸連へ送ってそこで検査される。マスコミでは大きく公表されなかったが、過去には女性の2選手が日本選手権後の検査で陽性反応と出たことがある。両選手は風邪薬による陽性反応と判明したが、IAAFの裁断は日本選手権後2カ月間の試合出場禁止を命じた。

過去、ジョンソン選手はじめ一流選手たちに陽性反応が出ると、共通したように「尿をすりかえられた」「だれかにはめられた」「絶対にドーピングはやっていない」等で、素直に認める選手はいない。果して尿をすりかえられるような事ができるのだろうか？ 関係者以外の人たちからよく質問される。

そこでオリンピックではどのような方法で検査が実施されるか、紹介しよう。

入賞4位までの選手を対象に抽出された選手は、競技終了直後に「ドーピング・コントロール・テスト招請カード」が渡される。選手は定められた時間に選手は所属する国の役員（医師、監督、コーチ、トレーナーのいずれかの一人）が付き添って、尿を採る部屋へ出頭する。テストを拒否すると陽性であったと記される。

尿の最小必要量は75ccで、出ないときは、待ち合い室で各種飲物（水、ジュース、ビール等）が用意されているので、飲物を摂取して、尿意がもようすのを待つ。特に長距離、マラソン選手は多少の脱水症状にあるので、ビールを飲む選手が目立つ。

採尿時には、不正がないように同性の役員がトイレの中まで付き添って現場を確認する。選手はクジを引いて、コード番号を選び、2本1組になったフタつきのビンを選べ。Aビンに尿をとり、Bビンに半分を分け、厳重に封をする。Aビンが分析用、Bビンは何か問題があった時の保存用としてとっておくのである。

厳しい監視下で行なわれるので、陽性と出た選手が「不正があった」ということは、とても考えられない。ただ選手の中には、1リットルの水分を補給しても尿が出ずに何時間も残される選手たちは、傍目でも可愛想な感じがした。

以上の様な厳しいテストで、IOCによると10%の選手はドーピングの疑いがあるとし、この点をマスコミは取りあげている。

1991年1月5日のソ連医療従事者同盟機関紙（メディチンスカヤ・ガゼータ）に「ソウル・オリンピックまでの3年間に290人ものオリンピック出場する力を持つ選手が薬物を使用、スポーツ当局から懲戒処分された」と掲載されたことが、日本のマスコミに紹介された。また、過去のオリンピック入賞者で、少なくとも40人以上が廃人になったり、死去したことも採り上げていた新聞もあった。

廃人といえば、1984年7月20日に男子やり投げで104m80の驚異的な世界新を出したウベ・ホーン選手（当時東ドイツ＝22歳）は、現在31歳だが、彼の姿を昨年みてギョッとした。1m98、110kgと大型選手で、筋肉隆々だった彼が、背中が曲り、どうみても70歳を過ぎた老人にみえたのだ。彼の大会記録によってヤリの規格が飛ばない様に変ったほど、104mはすごい記録だっただけに印象も深かった。彼の姿を拝見した陸上陣の多くは「ドーピングの副作用としか考えられない」と話題となったが、私の目にもそれしか考えられなかった。

IOC公認検査によると、検出薬物の内訳はタンパク同化ステロイドが58.5%、興奮剤が31%が最も多く、指摘されている。JOC（日本オリンピック委員会）の医事部で、ドーピング薬物として約300種類をあげている。

前述したように風邪薬でも陽性反応とでるので、最近では日本選手も担当医の指示を受けたり、オリンピック前には勉強会等で知識を吸収する努力をしている。バンクスの3年間の中京大特別講師時代に彼はよく風邪を引いたが、その都度本国（アメリカ）に連絡をし、担当医師の指示でアスピリン剤を服用していた。

ドーピング検査は、1994年のリレハメル冬季オリンピックから、一層厳しくするために血液検査を実施することをIOCは公表している。この検査方法については、宗教上の問題、ウィルス（エイズ）等が障害になっていた。

果してドーピングがスポーツ界から完全に切り除かれるか、勝ち負け、記録への挑戦がますますエスカレートする中で、今後の解決に注目したい。

4. オリンピックの将来展望

日本選手の今後の活躍について

筆者はオリンピックでの日本選手の活躍を大目標として、1975年より日本陸連の強化委員を務めてきた。しかし、夢の実現は難しく、世界の檜舞台を体験するたびに悲哀を強く感じてきた。その一つには経済大国にのし上った日本は、スポーツ界では残念な事に世界からは一歩も二歩も後退していることである。

陸上競技を例に上げると、今も昔も強化方法が大きく進歩していないことだ。強化費こそマラソン、駅伝の繁栄によって徐々にコマーシャル料などが上がって、現在では約1億円が強化費に使われている。でも強化方法は選手たちの練習環境を少しでも助けるため、相変らず強化合宿が鍛練期の冬場と夏場に組まれている。

場所も冬場は暖い沖縄、夏は涼しい北海道に固定化され、正月返上のトレーニングも繰り返してきた。しかし、トレーニング環境は恵まれたものでなく、ウェイト・トレーニング器具に至っては、業者からリースし、選手たちが運ぶこともしばしばで、なさけない思いをしたことも何回かあった。なにせ固定したナショナル・センターのような強化拠点地が定っておらず、強化対策のたびに頭を痛め、日本のみじめさを

痛感してきた。それでも他のスポーツ団体からは「陸上競技は恵まれているほうだ」との意見が多い。

オリンピックの開催のたびにその不振をマスコミが大々的に採り上げ、残念なことにその原因を糾明することは少なかった。マスコミの報道による反応は、反響も大きく、世論の批判も厳しかった。

しかし、前述のような強化環境が恵まれていることを知る人たちは少ない。むしろ日本は他国より恵まれているという人の方が多いだろう。確かに陸上競技は恵まれているかも知れない。日本全国には公認の陸上競技場が1種から5種まで含めると、なんと630カ所もある。全天候トラックも100カ所を越す。

進境著しい中国は、全天候トラックは全国に約30カ所と聞く。だが違いは内容にある。

日本の場合、使用時間が限られ、そこには宿泊施設、医科学が併用されず、使用料も高い。あってもないようなカ所が多い。反面中国ははじめ、世界の各国には強化拠点地があり、現場と医科学面が一体となって強化されている。この事については、いずれ“スポーツを考える”で採り上げるつもりだ。

以上の環境下で日本陸上陣が予想以上に活躍できたのは、下記の点が上げられる。

①強化費が多額になって、重点強化が効を奏した。

特に男女マラソンは夏場の酷暑対策として、医科学班を導入できた。選手には夏場のレースを体験させ、発汗作用、疲労状況の血液検査、高地（中国、アメリカ、メキシコ）訓練にも同行、選手間に意志の疎通ができたことも大きかった。本番での強い日差しをさけるサングラス、汗を吸収するランニングシャツ、ショックを柔らげるシューズ、ランニング中に上昇する体温をおさえる方法などが工夫された。栄養士の同行も、選手たちに好評であった。以上の経費が最も多く強化費として使われた。

②国際経験が生かされた。

陸上競技5種目（男子400m、400mリレー、マラソン、女子走高跳、マラソン）の入賞者と、

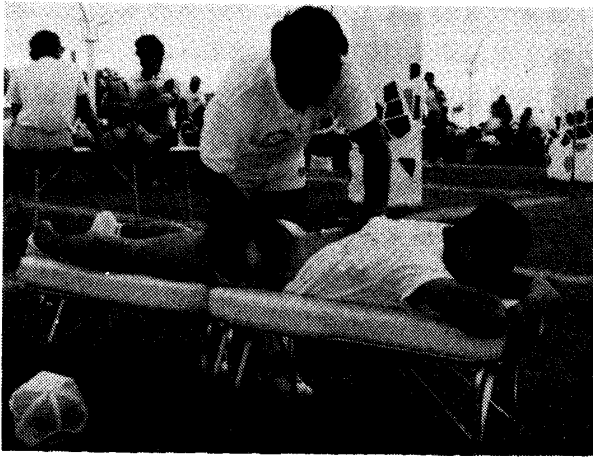
惜しかった種目の選手は全て、豊富な国際経験を積んだ選手たちであった。

③心理テストでも高い指数であった。

ソウル・オリンピック前より、日本体育協会(現在は分離して JOC)では、故松田岩男氏(前中京大学長)を中心にメンタル・マネージメント・プロジェクト・チームが生まれ、心理面でも何かと選手諸君にアレンデしてきた。カセットによる集中力の高揚など、選手たちにプラス面になることが多くあった。

④強化合宿、遠征が増えた。

本学職員の青戸慎司君、学生の鈴木久嗣君(体育学部4年)が出場し、4×100mリレーで6位



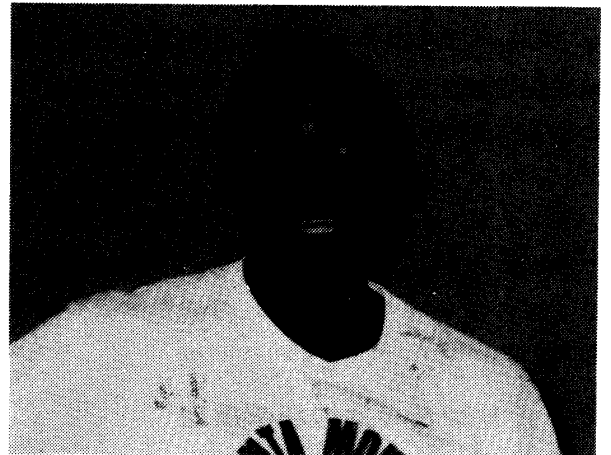
オリンピック、サブトラックで決勝前にトレーナーからマッサージを受ける青戸慎司選手。

になったメンバーは、チームワークを重視して、④を摘要した。台湾、沖縄、アメリカ、更に国内等でトレーニング合宿を積み、4選手の気持の一体感は2度の日本新をマークして入賞する要因となった。

以上のように成功した要因もあるが、日本選手の今後の活躍は、2000年に完成を目指しているナショナル強化拠点センターの設立にかかっているといえる。また、バルセロナ・オリンピックで最も活躍が著しかった日本水泳陣は、出場者全員がスイミング・クラブの所属出身であったことを考えると、日本スポーツ界も学校体育の壁を破って、それぞれのスポーツ・クラブ発足が急務といえそうである。

エスカレートする選手の褒賞金

プロとアマ壁が徐々に取り除かれたバルセロナ・オリンピックほど、過去のオリンピックを通じて話題になったことはないだろう。こうした世界の流れに JOC もいち早く反応し、金メダリストに300万円、銀200万円、銅100万円を公表して選手たちに褒賞金を授与した。しかし、世界の話になると桁が違う。



陸上競技のビジネス・プロとささやかれ、最も大金を稼いだといわれる走幅跳の勝者であり、100m 9秒86の世界記録保持者カール・ルイス選手(アメリカ)。

サラマンチ IOC 会長のおひざ下スペインでは、過去4年間に強化費230億円、53人の外国人コーチを招いた。その結果が13人が金メダルを獲得、それぞれ選手に1億3千万円が年金で贈呈されることが報道された。

アジア諸国の中国、韓国、フィリピンでも褒賞金について特に採り上げているが、日本より桁違いに多額である。その良し悪しは今後が解決するだろうが、プロとアマがオープン化すると日本でも当然今後は高とうすることが予想される。

既にプロ野球では1億円プレイヤーが18人、プロ誕生のサッカーでも1億円プレイヤーが出現した事を考えると、オリンピック参加の価値感も将来は大きく変貌しそうである。

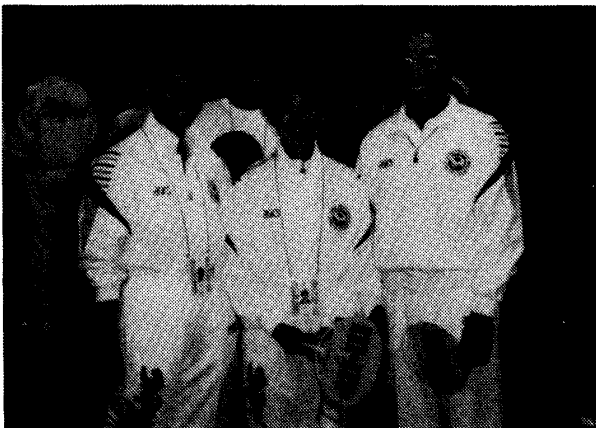
バルセロナ・オリンピックでは、日本は金メダル3個、銀メダル8個、銅メダル11個の合計22個であり、金メダル数では17位であった。このメダル数が褒賞金表示で、次期アトランタ・オリンピックではプラスと出るか、マイナスと出るか——成りゆきが注目される。

日本選手諸君はメダリストはJOCから表賞されたが、各競技団体でもメダリストと入賞者に対しても表賞するようである。我が中京大学の青戸、鈴木君への褒賞金も気になるところだが、現状では70万円を渡すことが妥当かどうか日本陸連で検討されていることを付記しておこう。

5. おわりに

バルセロナ・オリンピックは素晴らしい閉会式で、8月9日に無事に終了した。しかし、オリンピック後、本文をまとめる段階で気になるのが、世界の激しい民族の争いである。

かつて1980年のモスクワ・オリンピックは、ソ連がアフガニスタン進撃したことによって、アメリカ、日本、イギリスなど主要自由主義国家がボイコットした。その4年後の1984年のロサンゼルス・オリンピックでは、逆にソ連、東ドイツ等の共産国がボイコットして、片肺飛行の大会となった。



マラソンで活躍した選手たちと筆者（右端）、左から2位の有森選手、8位の谷口選手、4位の山下選手。

私自身、ロサンゼルス・オリンピックのとき、大変な場面を目撃したことについて触れたい。この大会は東諸国のボイコットで、何かテロ行為が勃発するのではないかと、選手村も緊張が張りつめていた。練習場が見える高層の建物の屋上には常にライフルを持った警察が警備に当たっていた。

陸上競技場（練習場）では、競技用のピスト

ルの使用が禁止され、合図は全て映画撮影を思い出す板をたたいてスタート練習するなど、笑いたくなるような練習をやっていた。だが、或る日、カナダの選手がスタート用のピストルを使った。

その時だった、“アッ”という間に防弾チョッキをつけた警察官が10数人、すごい勢いでピストルを持った選手に殺到、はがいじめに押さえこまれ、つれさられた。一瞬の出来事だったが、この場面を見た私の心臓は凍りつくようで、その場に座り込んでしまった。

選手は後に解放されたと聞いてホッとしたが、相当厳しく叱られたようである。

さてバルセロナ・オリンピックは史上最大の参加国となったが、ソ連ではEUNとして、12の共和国が参加。しかし、今後はそれぞれが独立して共和国として参加するだろう。だとすればアトランタ・オリンピックでは、バルセロナ・オリンピックより多国の参加が予想される。しかし、現状の世界は民族、宗教の争い、それに政治情勢など油断が許されない。

また、1993年が明けて間もないのに、各マスコミは2000年の夏季オリンピックの中国招致が不利になったことを報道している。中国はバルセロナ大会では、金メダル数がEUN 45個、アメリカ 37個、ドイツ 33個に次いで4位の16個を獲得した。中国スポーツ界の躍進は、世界から注目されているが、不利な条件に「中国の女子選手は何かを使っている数多くの兆候が認められた。ステロイド（筋肉増強剤）や成長ホルモンも使用の痕跡が見られる」（国際水泳連盟医事委員のデビット・ジュラード博士）が、指摘している。

以上の他に商業主義など、オリンピックはまさに大きく変貌しようとしている。過去に4回のオリンピックに携って感ずることを取り上げたが、今後もオリンピックがスポーツの頂点として、世界の平和に貢献をし、全世界の人達に感動を与えることを念願にして、この項を終りたい。